
灰色

8969

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色

【Nコード】

N7578S

【作者名】

8969

【あらすじ】

ケンとナミのちょっと複雑な恋愛関係。友達！？恋人！？それとも！？性同一性障害の現実。

「 幻 」

幻

二人で会うのはもう10回目だ。

『 ねえ、今日は朝まで一緒にいられるの？ 』

夜景の見える公園で呟くように聞いてみた。

『 明日も朝から仕事だから、ごめんね、 』

僕と彼女の関係は曖昧だ。

どちらからも告白のようなものはしていない。

ただ二人で会つと手を繋ぎ歩く。

周りから見れば普通のカップルだ。

彼女は僕よりも少し背が高い。

でも身長之差が気になっているのは僕だけのようだ。

『 そっか、じゃあそろそろ送っていくよ 』

そう言ってまた彼女の手を引き車へと歩いた。

『今日も楽しかったよ!』

彼女のマンションの前に着くと笑顔でそう言った。

『次はいつ会えるかな?』

『また連絡するから、ね!そんな寂しそうな顔されたら車降りにくくなっちゃうじゃん。』

身長のコМПレックスもあり、主導権はいつも彼女にある。

『ごめん、わかった。またメールしてね。』

僕の声は弱弱しかった。

そのまま顔を上げられずにいると、彼女が僕の顔を覗き込むようにキスをしてきた。

突然の一瞬の出来事に僕はただ驚くだけだった。

『じゃあね、気をつけて帰ってね、家着いたらメールちょうだい!』

笑顔で彼女は車を降り、何度も振り返って手を振ってマンションに入ってしまった。

二人で手を繋ぎデートをして、そしてキスもした。

二人は恋人同士なのだろうか。

僕はまだ彼女の苗字を知らない、名前も本名かは分からない。

彼女の仕事は昼と夜のシフト制であるらしい。

ただ、仕事の内容は教えてもらっていない。

彼女の住むマンションはわかっているが部屋の番号までは知らない。

もしかしたらその部屋には既に同棲してる男がいるかもしれない。

女々しいと思いながらも僕の気持ちはどんどん彼女に惹かれていき、

気がつけば一人でいる間、ずっと彼女の事を考えていた。

お互い必要以上の詮索はしない、もちろん束縛も無し。

二人でいる間は余計な事を考えずおもいっきり楽しみたい。

3回目か4回目のデートの時に彼女がそう希望した。

僕も二人でいられる貴重な時間を大切にしかかったから同意した。

それでも会えば会うほどに僕の気持ちは不安定になるばかりだった。

彼女のマンションからの帰り道に、その日デートした内容を思い返す。

映画や買い物、イタリア料理での食事や時には普通の居酒屋で何時間も過ごす時もあった。

いつも頭の中でその日のデートを繰り返し再生した。

時々、僕は夢を見てるのではないか、彼女は幻で、幻想の中で僕は一人生きているのではないかと思う。

夢ならすぐに覚めて欲しい。

だが手を繋ぎデートをし、10回目のデートでキスしたのは現実だ。

僕は家に着くと必ず彼女にメールをした。

するとすぐに返信が来る。

メールを見ると紛れも無く現実だと思わざるを得ない。

今までそれなりに女の子と普通の交際はしてきた。

でもこんなに不安になったり、相手の事をずっと考えるのは初めてだ。

彼女はまだ若い。

きつと最近の子達はこういった割り切った恋愛が普通なのかもしれない。

お互い束縛もせず、遊びたい時に男女問わず遊びたい相手と遊ぶ。

僕も今まではそれで大丈夫だった。

浮気の心配をされる事はあってもする事は殆ど無かった。

それは自分の気持ちが相手に対して本気ではなかったからかもしれない。

いや、今までも付き合ってる間は本気で好きだった。

別れた後もすぐに忘れられない子もいた。

ただこんなに自分の気持ちを自分でコントロール出来なくなった事はなかった。

彼女の気持ちを知りたい。

僕は恋人同士なのだろうか。

僕自身も彼女に好きだと言った事は無い。

もちろん彼女から言われた事も無かった。

いつまでも女々しく曖昧な気持ちでいるのは嫌だ。

もしかしたら彼女は僕がちゃんと告白をするのを待っているのかもしれない。

僕は次のデートで自分の気持ちを彼女に話そうと決意した。

「告白」

告白

僕は彼女にどう気持ちを伝えようか考えていた。

言ってフラれたらどうしようかとも考えた。

お互い今のまま何も言わず、会いたい時に会って、

その時間を大切にすべきなのだろうか。

僕の決意が不安定なまま次のデートの日はやってきた。

この日は彼女のリクエストでクラブに来た。

『今日は朝まで飲んで踊ろう』

今日も彼女のペースだ。

クラブ内の大音量や人ごみの中ではまともに話も出来ない。

それでも今日は朝まで一緒にいられる。

途中強引にクラブを抜け出す事だって出来るかもしれない。

彼女は楽しそうだった。

仕事のストレスや色んな悩みがあるのかもしれない。

僕はバーカウンターで楽しそうに踊る彼女をずっと見ていた。

『ねえっ！踊らないの？』

『俺はいいよ。。』

断ったつもりだったのだが彼女に手を引かれダンスフロアに連れて来られてしまった。

すると、彼女から僕に抱きついてきた。

大音量や人ごみのせいか、酔っていたのかもしれない、

非現実的な空間で大胆になっていたのかもしれない。

『ワタシ、ケンちゃんの事好きだよ。』

彼女が抱きつきながら僕の耳元で囁いた。

僕が今日、伝えようとしていた事を彼女から先に言われてしまった。

そんな自分が情けなかった。

『俺もナミの事が好きだよ。本気で好き。』

女々しい自分を振り払うように僕は彼女の目を見て言った。

クラブ内は重低音がきいた大音量でその声は彼女にしか聞こえてい

なかつただろう。

その瞬間だけは二人だけの世界だった。

彼女は微笑んでくれた。

その時はそれだけで満足だった。

結局その日は朝までクラブで踊っていた。

帰りのタクシーの中で踊り疲れた彼女は僕に寄りかかりながら眠っていた。

その寝顔を見ながら、

少しずつでいい、お互いの事をわかっていけたらと僕は思った。

タクシーが彼女のマンションに着き彼女を起こしたが、すぐには起きなさそうだったので

僕は彼女をかかえ二人でタクシーを降りた。

彼女のマンションはオートロックだったので僕一人の力では自動ドアの前までしか送る事が出来ない。

たとえオートロックが開いたとしても僕は彼女の部屋を知らない。

仕方なく入り口にあるベンチに腰をかけ彼女が起きるのを待った。

僕達は今日、本当の恋人になった。

でも今までの不安が全て無くなったわけではない。

もし彼女が起きて何も覚えていなかったらまた振り出しだ。

酔いが覚めてくると僕はまた現実と幻を彷徨う女々しい男に戻ってしまった。

そんな僕の不安を彼女の寝顔だけが癒してくれた。

それからどれくらい時間が経ったのかは分からない。

2、3分？、10分？、1時間？、

僕の気持ちが高不安定に行き来していると彼女がやっと目を覚ました。

始めは寝ぼけて今の状況を把握出来てなかった彼女も、

酔いが覚め、目が覚め、僕に話しかけた。

『ごめん、寝ちゃった、ていうかここワタシのマンション？』

『そうだよ、タクシーで送ってきたんだけどナミが起きないし、

オートロックも開かないし、ここで待つてたんだ』

そう僕が説明すると彼女もやっと状況を把握したようだった。

『本当にごめん、』

彼女は気まずそうだった。

『平気だよ、俺も酔ってたし、ここで酔い覚ましができたから』

僕は精一杯の笑顔を作ったが、彼女はさらに気まずそうな表情をしていた。

『家寄って行く?』

彼女からの思いがけない誘いに僕の酔いは一気に覚めた。

『いいの?無理しなくていいよ。』

僕は飛び上がるほど嬉しかったが平静を装って言った。

『大丈夫、部屋汚いけど、コーヒーぐらい煎れるから。』

そう言っただけで彼女は僕と手を繋いだままオートロックを開け、エレベーターに乗り、

6階の部屋まで歩いていった。

思ったより広い1LDKの彼女のマンションに同棲している男の影はなかった。

また一つ彼女の事が知れて、距離が縮まった事に安心した。

「告白 2」

告白2

僕は彼女が煎れてくれたコーヒーを全部飲む前に寝てしまっていた。目が覚めると僕はベッドに寝ていた。

隣には彼女が寄り添うように寝ていた。

僕は目が覚めた時に隣に好きな人が一緒にいる事をこんなに幸せに感じた事はなかった。

僕が起きるとすぐに彼女も目を覚ました。

『おはよう。』

幸せを噛締める様にキスをした。

『ケンちゃん、シャワー浴びてきなよ、昨日はいっぱい汗かいたし』

『ごめん、俺汗臭かった？』

『大丈夫、きつとワタシも臭いから、だから先にシャワー浴びてきて！』

その後でワタシもシャワー浴びるから』

彼女は笑いながらそう言ってバスルームに案内してくれた。

僕がシャワーから上がるとそこにはバスタオルと新しい下着、

Tシャツとスエットが畳んで置かれていた。

彼女は僕よりも少し身長が高い、そして細身の僕の体は彼女の女物のTシャツとスエットが

ちょうどいいサイズで着れた。

僕はそれを着てリビングへと行くと彼女はコーヒーを煎れて待っていてくれた。

『やっぱり着れた!』

そう彼女は笑っていたが僕はちょっと照れ臭かった。

『でもデザインも女物だし、それより下着買って来てくれたの?』

『うん、目の前のコンビニで!朝ごはんも買ってきたからワタシがシャワー浴びてる間に食べてて!』

『ありがとう!後でお金払うね』

『いいよ、昨日のタクシー代って事で!、それよりシャワー浴びてる時覗かないでね!』

そう言って彼女はバスルームへ行ってしまった。

彼女がシャワーを浴びている間、僕はコーヒーだけを飲み、

朝ごはんは彼女が戻ってくるまで手をつけずにいた。

あらためて部屋を見渡すと広く、整理整頓されたきれいな部屋だった。

すぐ近くのバスルームにいるのに彼女を待っている時間が凄く長く感じた。

『先食べててっていったのに』

彼女がリビングに戻ってきた時はしっかりと化粧もされていた。

『せっかく一緒にいれるんだから一緒にごはんも食べようよ』

『ケンちゃんて優しいんだね。』

そう言いながら彼女がつつむいたのに僕は気がつかなかった。

僕達は普通のカップルのようにリビングでコンビニのサンドウィッチを食べた。

『なんかさ、こうやってごく当たり前のように一緒にごはん食べてるけど、俺今凄く幸せだよ。』

ナミと一緒にいると何もかもが幸せに思えるんだ。』

僕は素直な気持ちを伝えた。

きつと笑って『ありがとう』と言ってくれると思っていたのだが、
彼女は下を向いて泣いていた。

『ごく当たり前のように…か…』

彼女が泣きながら呟いた。

『どうしたんだよ？なんで泣いてるの？嬉し泣き？』

僕は少し慌てながら彼女に聞いた。

『ワタシも泣いちゃうぐらい幸せだよ…でも…それ以上に辛いよ…』

彼女の様子はあきらかにおかしかった。

『何で？何で辛いのか？俺何かナミの事傷つけちゃったかな？』

『うっうん…ケンちゃんは何も悪くないの…でももう会つのはやめ
よう…』

『何言ってるんだよ？ナミの言ってる事がよくわからないよ。昨日
好きだって言ってくれたじゃん。』

『ケンちゃんの事は本当に好きだよ。本気で好きになっちゃったか
ら辛い…』

僕はどうしていいかわからなかった。

ただ彼女が泣き止むのを待つしかなかった。

広い部屋に彼女がすすり泣く声だけが響いた。

しばらくして彼女が少し落ち着いたようだったので僕から切り出した。

『なあ、どういふ事が説明してよ。もし今話すのが辛かったら今日じゃなくてもいいから』

彼女は首を振って僕のほうを見た。

『ケンちゃんはきつと、ワタシの事を知ったらいなくなっちゃうから…』

本当のワタシを知ったら好きじゃなくなっちゃうから…』

『なんでナミの事を知ったらナミの事嫌いになるんだよ？

知れば知るほどもっと好きになるに決まってるじゃん』

何も知らない僕は素直にそう思った。

『ずっと内緒にしておけたらこうやってごく当たり前の幸せを感じれるのに…』

でもケンちゃんがいい人だからワタシ嘘つきたくなって…』

『俺、何でも受け入れようと思ってるよ。だから話してよ。』

僕の頭は混乱するばかりだった。

それでも、

彼女にどんな過去があるうと、今がどんな状況であるうと僕は全てを受け入れる気持ちだった。

僕は彼女を強く抱きしめた。

すると彼女は声にならないような声で僕の耳元で囁いた。

『ワタシね…女じゃないの…』

「性」

性

僕はその言葉に一瞬驚いた。

そしてその事を理解するのに少し時間がかかった。

そんな僕の動揺がさらに彼女を傷つけてしまっている事にも気がつかなかった。

僕は何て言えばいいのかわからなかった。

すると今度は少しハッキリとした口調で彼女が話し始めた。

『ワタシね、本当は男なの。性同一性障害のニューハーフなの…』

だからケンちゃんとかく当たり前のカップルになんかなれないの…

ごく当たり前のカップルのようにHだって出来ないし、結婚だって出来ない…

ずっと黙っててごめんなさい…』

僕は彼女を抱きしめる事しか出来なかった。

『ワタシは生まれた時から心は女の子で、体は男の子だったの…』

でも家族も友達もそんなワタシを軽蔑して、だから17歳の時に家出して東京に来たんだ。

住む所も無くてお金も無くなって、ひとりぼっちの時に今のお店にスカウトされて…

そこのお店の人は皆ワタシの事女の子として見てくれたんだ。

皆優しくかったし、ワタシと同じ悩みを持った子がいっぱいいて嬉しかった。

そのお店っていつでも風俗だけどね…

そこで働き始めて、整形して、毎月女性ホルモンを注射して、体も女の子に近づけたけど…

ちゃんとした性転換手術をしなきゃ本当の女の子にはなれない。

その性転換手術のお金を稼ぐために変態の性癖の相手をしてるんだよワタシ…

ケンちゃんみたいな人がそんなワタシを好きになっちゃだめだよ…』

彼女はきつと本気で僕と別れようとして全てを話してくれたのだから。

僕は何て言葉をかければよいかわからなかった。

でも僕は抱きしめた手を離したくは無かった。

『今まで黙ってて本当にごめんなさい。』

好きな人と手を繋いでデート出来て幸せだった。

今朝起きてケンちゃんが横に寝ててキスしてくれて、

本当にワタシ幸せだった。こんなワタシだけど本気で人を好きになれて幸せだった…

でも本気で好きになった人をこれ以上騙す事なんか出来ない…、

ごめんね、ケンちゃん…手を離して…もう会うのはやめよう…』

彼女は僕の腕を振りほどくように立ち上がって僕に背を向けた。

彼女が真剣に話してくれたのに僕は何も言ってあげられなかった。

僕はまだ彼女が言った事が理解できずにいた。

『ケンちゃんの服そこにかけておいたから着替えて出て行って…早く…お願い…』

彼女はへたり込みまた泣き始めてしまった。

僕が動揺したまま彼女の前にいればいるほど彼女を傷つけてしまい
そつで、

僕は服を着替えて彼女の部屋を出た。

でもそれは僕の逃げでしかなかった。

彼女の全てを受け入れられなかった僕の弱さでしかなかった。

それから僕は彼女の言っていた事を理解するのに随分時間がかかってしまった。

ニューハーフの人の事は知っていたけど正直テレビや雑誌の中だけの事だった。

性同一性障害という病気の事も僕なりに色々調べた。

性同一性障害という病気の人は沢山いて、でも世間でのその認知度は低く、

皆ナミのように悩み苦しんでいるという事。

男が女として働ける場所が極僅かで、その殆どが風俗関係である事。

性転換手術を受けるための多額のお金を稼ぐためにそついった仕事をしている事。

恋愛だけでなく、お風呂やトイレ、プールなど、

僕達のごく当たり前前のようにしてきた事がごく当たり前前に出来ずにいる事。

調べれば調べるほど、

僕達が普通の生活をしている中で性同一性障害の人達を知らない内に差別し生き辛くしている事がわかった。

僕がようやくナミの事を理解出来た時にはもう彼女を傷つけてしまった後だった。

なんで僕があんなにも彼女に惹かれたのか、ようやくわかった気がする。

今でも僕は彼女の事が好きだ。

彼女は紛れもなく女の子だ。

いや、もう男とか女とか関係ないのかもしれない。

とにかく僕は彼女の事を愛している。

僕はどうしてもそれを伝えたくて彼女のマンションに向かった。

「運命」

運命

僕は彼女のマンションの近くで待っていた。

夜になっても次の日の朝になっても彼女の姿はなかった。

それでも僕は彼女を待った。

その時の僕はただのストーカーでしかなかった。

あの日からもう1ヶ月近く経っている。

もしかしたらもう他の場所に引っ越してしまったかもしれない。

僕は次の日も自分の家には帰らず彼女を待った。

そんな2日目の夜、彼女がコンビニから出てくるのを見つけ駆け寄った。

「ケンちゃん…」

彼女は僕に気がついてくれた。

「ナミ、待ち伏せしてごめん、話したい事があるんだ」

彼女は一瞬驚いた表情をしたが、僕を部屋にあげてくれた。

部屋に向かう途中会話は無く気まずい空気だけが漂った。

『ケンちゃん、いつからいたの?』

『えっと…昨日の昼間かな、』

『それってストーカーじゃん!すぐにシャワーを浴びてきなさい!』

彼女が笑顔で気まずい雰囲気を変えてくれた。

僕は何をやっているんだろう。

散々彼女を傷つけ、さらにストーカーになり、部屋に上がりこんでシャワーまで借りている。

シャワーからあがると、やっぱりバスタオルと新しい下着、彼女のTシャツと短パンが畳んで置いてあった。

でも今日のTシャツは男物のような柄だった。

リビングに戻ると彼女はまたコーヒーを煎れて待っていてくれた。

彼女はコーヒーを豆から挽く。

リビングにはコーヒーの香りが漂っていた。

『なんか、ごめん迷惑かけちゃって…』

『あのままずっとマンションの前で待たれるより2日目に捕獲でき

て良かったよ!』

彼女は前と変わらず僕に接してくれた。

『ナミ、あのさ、』

『ワタシね、元々あの日でケンちゃんとお別れするつもりだったんだ。』

僕が話そうとすると彼女がそれを止めるように話してきた。

『だからわざとうるさいクラブに行って、大音量の中で酔ったフリして、』

ワタシはオカマでーすって言って別れようとしたの。

でも言えなかった…好きとしか言えなかったの…』

僕は自分の気持ちを伝えようとしていたのに、彼女の話の聞いてしまった。

『あんな別れ方になっちゃってごめんね…ケンちゃんのこと傷つけちゃったよね…』

『そんな事ない、俺の方こそ黙って出て行っちゃって、本当にごめん、』

あれから色々考えて、やっぱりナミの事好きだから、、、』

彼女は笑顔のまま涙を流していた。

『ありがとう、あれからワタシも何度もケンちゃんにメールしようと思ったけど出来なかった、』

1週間経って、2週間経って、ケンちゃんからも連絡が来なくて、

ちゃんと気持ちの整理をしてたつもりだったけど、

今日ケンちゃんの顔見たらやっぱりすぐには忘れられないなっと思っちゃった…』

『今日まで連絡しなくてごめん…』

『いいの、気にしないで、慣れっこだから。いつも皆そうだったから。』

ワタシが男だつて知ると皆ワタシを傷つけないように去っていくんだ。

ワタシが騙してたんだから仕方が無いんだよ…

でもケンちゃんは戻って来てくれたんだね… それだけで十分嬉しかった。』

彼女は泣いたままでもずっと笑顔だった。

『ワタシね、来週、フィリピンに行くんだ。念願の性転換手術を受けに行くの。』

もうお店も辞たんだ。この部屋も今週いっぱい引越すの。

だからもしケンちゃんが来てくれるのが来週だったら会えなかったんだよ。

なんか凄いね、これが運命ってやつなのかなっと思っちゃったよ。

』

ナミの言うとおり僕がここに来るのが来週だったらもう二度と会えなかったかもしれないと思うと、

僕は物凄く安堵した。

『性転換手術をしたら日本でも戸籍を女に変更出来るんだよ！

そうしたらどうだろうと女として色んな仕事が出るし、今までみえない後ろめたさはちょっとなくなるかな！？

ワタシは新しいワタシに生まれ変わるの！』

僕も性転換手術を受けたら性別を男から女に変更出来る事は知っていた。

『今までのワタシはワタシでちゃんと心に閉まっておくんだ。

過去を引きずるとかじゃなくて、それも新しく生まれ変わったワタシの一部だから。』

『ナミ、俺はナミが新しく生まれ変わっても、どんなナミでも好きだよ。』

『ありがとう、今のワタシはまだ自信が持てないけど、きっと生まれ変わったらちゃんとケンちゃんの気持ちを受け止められる気がする。』

彼女は今までどれだけの心の傷をおってきたのだろう。

その傷の一つが僕の責任である事は確かだ。

でも今の彼女はしっかりと前を向いている。

今までの事もしっかりと受け止めて前を向いて歩こうとしている。

『俺、来週ナミがフィリピンに行く時に車で送っていくよ。それで日本に帰って来る時は必ず迎えに行く。』

今までのナミの最後の姿と新しいナミの姿をしっかりと見て、それでナミの事を受け止めるから。』

僕はナミの性別が女に変更された日にプロポーズをするつもりである。

でも今はその事はナミには伝えないでおこうと思う。

「 灰色 」

灰色

『ねえケンちゃん、なんで神様は人間を作る時に、男と女の２種類しか作らなかつたんだと思う？』

本当に神様は男と女の２種類だけしか作らなかつたのかな？

ワタシね、色んな色があるように、人間も皆違うと思うんだ。

大きく分けると男と女で白と黒の２色だけど、きっと皆色んな色を持って生まれるんだと思う。

ワタシ達みたいなのは白と黒をまぜた灰色ってところかな！？』

きっと彼女の心の中には男として生まれた自分はあるのだろう。

『そうだね、俺の中にも女々しい自分があるからきっと俺も白でも黒でもないよ。』

空港に向かう途中二人で笑いながら話した。

男と女、そしてナミのような性同一性障害の人、日本ではまだまだ認知度は低いが、

海外の国では男同士や女同士の結婚が認められている国もある。

『性転換手術をして戸籍を男から女に変更したら結婚は出来るけど子供は作れないんだよね、

いくら愛し合った二人でも男同士や女同士では子供は作れないんだよ、おかしいよね?』

ナミの言ってる事は正しい疑問だ。

男と女なら二人の間に愛が無くても子供は作れてしまう。

愛が無く出来てしまった子供の多くは人工妊娠中絶によりこの世に生まれる事は無い。

考えて見るととても理不尽な事である。

『神様にもきつと欠点があったのかもしれないね!』

彼女はそう笑っていたが、きつとこの先、戸籍が変更されても子供の事で悩み苦しむかもしれない。

『ワタシは好になった人に好きって言えるまでに凄く時間がかかったし、

好きになった人と普通のカップルみたいに街を手を繋いでデートするまでにはもつと時間がかかった、

さらに結婚するには法律まで関わってきて凄く難しい事なんだよね。』

僕は彼女のこの言葉を一生忘れない。

ごく当たり前の事がごく当たり前に出来る事がどれだけ幸せな事を。

）
E N D
（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7578s/>

灰色

2011年5月17日14時52分発行